

## 【原著論文】

# 乳幼児への「言葉かけ」「語彙選定」と「伝達」「非伝達」経験 —現職保育者及び保育者志望学生への質問紙調査から—

戸田 大樹\*・大村 良恵\*\*

## 摘要

本研究では、現職保育者と学生の保育経験年数、乳幼児に対する「言葉かけ」・「語彙選定」の「伝達」「非伝達」経験における重要性と割合の認識、以上2つの関係を明らかにすることを目的としている。質問紙調査の結果、現職保育者と学生の保育経験年数、乳幼児に対する「言葉かけ」「語彙選定」の「伝達」「非伝達」経験の重要性とその割合、この2つには関係があることが明らかになった。具体的には、養成校は、学生に対して乳幼児への「言葉かけ」は「伝達4割以下：非伝達6割以上」の割合で学習するよう、自己評価の観点を示すことが重要であり、学生が乳幼児に対する「言葉かけ」の適切さを省察する過程において、自己評価の客観性が増し、主観的な自己評価から、客観的で現実に即した自己評価につながっていく可能性が示唆された。

## 1. 問題と目的

近年、現職保育者の早期離職が問題となっている。この要因としては、現職保育者の質低下も含まれていることが指摘されている（新藤，2008）。これには、保育者養成校（以下、「養成校」とする）が大きく関係していると考えられる。現職保育者の質向上については、養成校において常に追求され続けている課題である（渡邊，2002）。それに対し、厚生労働省（2008）は、現職保育者が保育現場で求

---

\* 創価大学

\*\* 聖徳大学大学院児童学研究科・院生

められる多様な課題に対応できるようにするため、現職保育者の専門性を高めるための養成の在り方の見直しを継続している。

養成校には、保育者志望学生（以下、「学生」とする）の乳幼児に対する「言葉かけ」と「語彙選定」の「実践知」を高める責務がある。しかし、養成校では「実践知」の高い現職保育者が育成され難い現状がある。よって、養成校が、学生の「言葉かけ」と「語彙選定」の「実践知」の低下に関する問題を解決するためには、保育経験が短い（ない）学生の「実践知」の向上のため、「経験内容」の精選と「量」の保障という視点が重要である。

「言葉かけ」とは、「保育者が幼児に対してことばを通して行う援助のあり方の一つ」と定義される（後藤，2015，p104）。さらに、「保育者が幼児に言葉をかけることによって、共感や励ましを受け信頼関係が結ばれる、アイデアや知識の提供を受ける、漠然とした思いが明確になる」ものである（後藤，2015，p104）。他方、「語彙選定」とは、現職保育者が「幼児の身近にありたい」「教育上指導しておきたい」という両者の視点を重ね合わせ、語の単位で指導する言葉を選定することを指す（福沢・池田，2004）。

本研究では、学生による「言葉かけ」と「語彙選定」の「実践知」の向上のための重要な経験内容を、乳幼児に対する学生自身の「言葉かけ」と「語彙選定」が「伝達（伝わる）」経験と「非伝達（伝わらない）」経験、ととらえることとする。保育実践において、現職保育者は自分自身が表出した「言葉かけ」が、乳幼児に対してどのように伝わったのか（伝わらなかったのか）を見極めることが必要になる（高濱，2013）。ここでの「伝達（伝わる）」とは、「現職保育者の乳幼児に伝えたい事柄が、『言葉かけ』と『語彙選定』によって適切に伝わる」ことを指し、「非伝達（伝わらない）」とは、「現職保育者の乳幼児に伝えたい事柄が、『言葉かけ』と『語彙選定』によって適切に伝わらない」ことを指す。

諏訪（2000）は、「保育の質」について現職保育者の専門性に関する概念図の中心に「現職保育者の意識」を位置づけている。このことから、現職保育者の専門性を議論する際、現職保育者の感情や意識に着目することが重要であると考えられる。乳幼児に対する「言葉かけ」と「語彙選定」に伴う感情に着目した研究として、戸田（2020）は、現職保育者は学生に比べて自信と手応えを感じ、学生は現職保育者に比べて不安と困難を感じていることを報告している。新規採用保育

者や学生は、乳幼児が登園してから降園するまで、乳幼児が示す喜怒哀楽など様々な感情に対して適切な「言葉かけ」と「語彙選定」を試みている。彼らは、自身の「言葉かけ」と「語彙選定」が乳幼児に対する「伝達（伝わる）」「非伝達（伝わらない）」経験を積み重ねる過程において、自信や不安などの楽観的または悲観的な感情を抱いていると考えられる。

特に、保育経験年数が短い新規採用保育者や2か月程度しか実習経験を積んでいない学生、実習すら経験していない学生は、乳幼児に対する「言葉かけ」以前に、「語彙選定」にも困難を示す傾向にある。なぜなら、新規採用保育者が経験してきた実践の大半は、学生時代の保育実習や幼稚園教育実習であり、保育経験年数が短いのが現状だからである。短い保育経験しか積んでいない場合、学生の乳幼児に対する「言葉かけ」と「語彙選定」に関する「伝達（伝わる）」・「非伝達（伝わらない）」経験が、十分に保障されているとは言い難い。したがって、養成校は、学生が経験すべき適切な「伝達（伝わる）」「非伝達（伝わらない）」経験の重要性について検討する必要がある。

この点を検討する上で、基準となる保育経験年数を、5年と考える。現職保育者の保育経験年数は、短期的または長期的に向上される専門性や保育者の成長を明らかにする最も重要な指標である（上山・杉村，2015）。また、保育教諭養成課程研究会（2016）は、悩みを抱えつつ幼稚園教員としての力量が育つには3年から5年かかると報告している。例えば、保育経験年数5年の現職保育者は、自分自身の乳幼児に対する「言葉かけ」と「語彙選定」に自信や手応えを感じつつも、同時に不安や困難を抱くであろう。他方、保育経験が2か月程度と短い学生は、現職保育者よりも強い不安や困難を抱くと推測される。しかし、現職保育者の場合、日々の保育実践の最中に、現職保育者の援助の意図が達成されている乳幼児の「望ましい姿」や「配慮が必要な姿」など様々な姿に対して、工夫しながら柔軟に「言葉かけ」や「語彙選定」を試みることができる（戸田，2019）。これを可能とする要因は、保育実践の中での「成功」と「失敗」に裏付けられた長い保育経験年数である。

特に重要なのは、自分自身の乳幼児に対する「言葉かけ」と「語彙選定」における不安や困難の原因となる「非伝達（伝わらない）」経験であり、それを粘り強く改善し続けるプロセス、つまり、現職保育者の「熟達化」である。現職保育者

は、単に保育経験年数を積み重ねていることに終始しているだけではない。現職保育者は、保育経験年数に裏付けられた鋭い省察を駆使して、自分自身の「言葉かけ」と「語彙選定」が乳幼児に対して「伝達（伝わる）」「非伝達（伝わらない）」の側面から分析し、翌日の保育実践に向けて改善を図る中で自分自身の成長を促していると考えられる。

上山・杉村（2015）は、保育経験年数と省察には関係性があり、現職保育者の「実践知」の向上には、保育経験年数を重ねることも重要であるが、それとともに行う省察が不可欠であることを示唆している。また、どの程度の保育経験年数を積めば「実践知」の向上に寄与するのかについて、平松（2011）は、現職保育者は事例検討などによって自分の保育の曖昧な部分について再確認することの意味に気づいており、自分を振り返ることでより主体的な省察につながられることを指摘している。

この省察においては、乳幼児の状態に気づき、分析的に振り返ることが重要である（上山・杉村，2015）。高濱（2001）は、現職保育者が中堅保育者（5年～10年）に成長することにより、幼児の行動を理解する際、一緒に遊びながら、幼児の意図を実現するための援助に気付く段階に成長すると指摘している。他方、荒井（2016）は、学生が他者から収集した情報を自分自身や子どもに関する省察に利用していないという可能性を指摘している。

これらのことから、保育経験年数が長い保育者は、日々の主体的な省察によって、乳幼児に対する「言葉かけ」と「語彙選定」における「伝達（伝わる）」「非伝達（伝わらない）」の重要性について客観的な自己評価が可能であると考えられる。他方、保育経験が短い（ない）学生はそれが困難であり、省察を試みても主観的な自己評価に終始していると考えられる。そのため、現職保育者を目指す学生に対して、彼ら自身の「言葉かけ」と「語彙選定」が乳幼児に対する「伝達（伝わる）」「非伝達（伝わらない）」経験を、現職保育者が重要だと認識している割合で積むことが、彼らの成長に寄与すると考えられる。しかし、現職保育者と学生を対象とし、「言葉かけ」と「語彙選定」の能力向上における「伝達（伝わる）」「非伝達（伝わらない）」経験の重要性とその割合の認識に関する実証的な知見はないのが現状である。

以上、養成校における学生の乳幼児に対する「言葉かけ」と「語彙選定」に関

する指導内容の改善に向け、本研究では、現職保育者と学生の保育経験年数、乳幼児に対する「伝達（伝わる）」「非伝達（伝わらない）」経験における重要性と割合の認識、以上2つの関係を明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究方法

### 目的

現職保育者と学生の保育経験年数、乳幼児に対する「言葉かけ」と「語彙選定」における「伝達（伝わる）」「非伝達（伝わらない）」経験の重要性と割合の認識、この2つの関係を明らかにすることを目的とする。

### 調査対象

調査対象者は、5年以上保育者58名（男性1名、女性57名）、5年未満保育者25名（男性1名、女性24名）、実習経験済学生60名（男性3名、女性57名）、実習未経験学生35名（男性16名、女性19名）であった。

### 調査期間

2018年9月～11月。

### 手続き

幼稚園や保育所の現職保育者と保育者養成校の教員に調査を依頼し、質問紙の配布・回収を実施した。

### 調査内容

#### フェイスシート

現職保育者：性別、年齢、居住地、就労形態、保育者に尋ねた子どもの年齢、所属、保育経験年数、保育士資格取得先、幼稚園免許状取得先の9項目。

実習未経験学生：学年、性別、年齢、居住地、所属の5項目。

実習経験済学生：学年、性別、年齢、居住地、所属、実習先の6項目。

#### 質問項目

質問内容は、表1の通りである。なお、「5年以上保育者」と「5年未満保育者」に対しては、実際に担当した年齢の乳幼児に対してのみ、乳幼児に対する「言葉かけ」と「語彙選定」における「伝達（伝わる）」「非伝達（伝わらない）」経験の重要性とその割合について回答するように求めた。

また、「実習経験済学生」に対しても、実習先で実際に担当した年齢の乳幼児に対してのみ、乳幼児に対する「言葉かけ」と「語彙選定」における「伝達（伝わ

る)」「非伝達(伝わらない)」経験の重要性とその割合について回答するように求めた。

表1 現職保育者・学生の乳幼児に対する「言葉かけ」「語彙選定」における「伝達(伝わる)」「非伝達(伝わらない)」経験の重要性と割合に関する質問項目

---

**現職保育者への質問項目**

---

1. 学生時代に行った一斉保育(幼稚園や保育所での部分実習や責任実習)の時のご自身の言葉かけ/語彙選定が乳幼児に「伝わる」経験を積むことは、新任保育者になってからの乳幼児への「言葉かけ/使用する語彙の能力向上」に重要だと思いますか。
2. 学生時代に行った一斉保育(幼稚園や保育所での部分実習や責任実習)の時のご自身の言葉かけ/語彙選定が乳幼児に「伝わらない」経験を積むことは、新任保育者になってからの乳幼児への「言葉かけ/使用する語彙の能力向上」に重要だと思いますか。
3. 学生時代に行った一斉保育(幼稚園や保育所での部分実習や責任実習)の時のご自身の言葉かけ/語彙選定が乳幼児に「伝わる」経験または「伝わらない」経験は、新任保育者になってからの乳幼児への「言葉かけ/使用する語彙の能力向上」においてどのくらいの割合が重要だと思いますか。

---

**実習経験済学生への質問項目**

---

1. 一斉保育の時のご自身の言葉かけ/語彙選定が乳幼児に「伝わる」経験を積むことは、新任保育者になってからの乳幼児への「言葉かけ/使用する語彙の能力向上」に重要だと思いますか。
2. 一斉保育の時のご自身の言葉かけ/語彙選定が乳幼児に「伝わらない」経験を積むことは、新任保育者になってからの乳幼児への「言葉かけ/使用する語彙の能力向上」に重要だと思いますか。
3. あなたは幼稚園や保育所で部分実習・責任実習を終えてみて、一斉保育の時のご自身の言葉かけ/語彙選定が乳幼児に「伝わる」経験または「伝わらない」経験は、新任保育者になってからの乳幼児への「言葉かけ/使用する語彙の能力向上」においてどのくらいの割合が重要だと思いますか。

---

**実習未経験学生への質問項目**

---

1. あなたは一斉保育(幼稚園や保育所での部分実習や責任実習)の時のご自身の言葉かけ/語彙選定が乳幼児に「伝わる経験」を積むことは、新任保育者になってからの乳幼児への「言葉かけ/使用する語彙の能力向上」に重要だと思いますか。
  2. あなたは一斉保育(幼稚園や保育所での部分実習や責任実習)の時のご自身の言葉かけ/語彙選定が乳幼児に「伝わらない経験」を積むことは、新任保育者になってからの乳幼児への「言葉かけ/使用する語彙の能力向上」に重要だと思いますか。
  3. あなたは一斉保育(幼稚園や保育所での部分実習や責任実習)の時のご自身の言葉かけ/語彙選定が乳幼児に「伝わる経験」または「伝わらない経験」は、新任保育者になってからの乳幼児への「言葉かけ/使用する語彙の能力向上」においてどのくらいの割合が重要だと思いますか。
- 

① 現職保育者と学生の乳幼児に対する「言葉かけ」「語彙選定」における「伝達(伝わる)」「非伝達(伝わらない)」経験の重要性に関する質問

現職保育者と学生の乳幼児に対する「言葉かけ」「語彙選定」における「伝達(伝わる)」「非伝達(伝わらない)経験の重要度に関する4つの質問に対する回答は、

「5：とても重要だと思う、4：やや重要だと思う、3：どちらでもない、2：あまり重要だと思わない、1：まったく重要だと思わない」の5段階評定尺度とした。

## ② 現職保育者と学生の乳幼児に対する「言葉かけ」「語彙選定」における「伝達（伝わる）」「非伝達（伝わらない）」経験の重要性の割合に関する質問

現職保育者と学生の乳幼児に対する「言葉かけ」「語彙選定」に関する2つの質問の回答は、「伝わる10割：伝わらない0割」、「伝わる9割：伝わらない1割」、「伝わる8割：伝わらない2割」、「伝わる7割：伝わらない3割」、「伝わる6割：伝わらない4割」、「伝わる5割：伝わらない5割」、「伝わる4割：伝わらない6割」、「伝わる3割：伝わらない7割」、「伝わる2割：伝わらない8割」、「伝わる1割：伝わらない9割」、「伝わる0割：伝わらない10割」の中から一つ選択するよう求めた。

### 倫理的配慮

本研究は、「創価大学・人を対象とする研究倫理委員会」の承認を得て行った（承認番号：30021）。調査対象者には、研究の意義、目的、研究への参加は任意であること、匿名性の保持の方法について文書で説明し、同意書の提出をもって調査協力への同意とした。

## 3. 結果

### 3.1 現職保育者と学生の乳幼児に対する「言葉かけ」「語彙選定」における「伝達（伝わる）」「非伝達（伝わらない）」経験の重要性について

現職保育者と学生の乳幼児に対する「言葉かけ」「語彙選定」のそれぞれに対する重要度得点について、「伝達（伝わる）」「非伝達（伝わらない）」別の平均値と標準偏差を算出した（表2）。また、その得点について、現職保育者と学生に尋ねた性別と年齢の平均値には差がなかったので、データを合わせて検討した。それ以外は、現職保育者と学生に尋ねた項目が重ならないため検討には含めなかった。

表2 現職保育者と学生の乳幼児に対する「言葉かけ」「語彙選定」における「伝達（伝わる）」「非伝達（伝わらない）」の重要度得点の平均値と標準偏差

援助	経験	対象	N (母集団数)	M (平均値)	SD (標準偏差)
言葉かけ	伝達	5年以上保育者	58	4.34	0.81
		5年未満保育者	25	4.36	0.81
		実習経験済学生	60	4.72	0.59
		実習未経験学生	35	4.51	0.74
		合計	178	4.51	0.74
	非伝達	5年以上保育者	58	4.36	0.79
		5年未満保育者	25	4.12	0.93
		実習経験済学生	60	4.58	0.65
		実習未経験学生	35	4.11	0.99
		合計	178	4.35	0.83
語彙選定	伝達	5年以上保育者	56	4.00	0.85
		5年未満保育者	25	4.16	0.90
		実習経験済学生	60	4.54	0.63
		実習未経験学生	35	3.94	0.89
		合計	174	4.20	0.83
	非伝達	5年以上保育者	57	4.02	0.79
		5年未満保育者	25	4.04	0.94
		実習経験済学生	60	4.36	0.81
		実習未経験学生	35	3.94	0.92
		合計	174	4.12	0.86

次に、「5年以上保育者」、「5年未満保育者」、「実習経験済学生」及び「実習未経験学生」を対象とし、乳幼児に対する「言葉かけ」と「語彙選定」における「伝達（伝わる）」「非伝達（伝わらない）」経験の重要性の認識について、保育経験年数を要因とする1要因の分散分析を行った。

第1に、表2に示した通り、「5年以上保育者」、「5年未満保育者」、「実習経験済学生」及び「実習未経験学生」の重要度得点の平均値が4以上であった。このことから、全対象が乳幼児に対する「言葉かけ」の「伝達（伝わる）」経験を重要視していることが認められた。

また、「言葉かけ」の「伝達（伝わる）」経験における保育経験年数の関係に有意差が認められた ( $F(3, 174) = 2.97, p < .05$ )。Tukey法を用いた多重比較の結果、「5年以上保育者」と「実習経験済学生」の組み合わせの間に有意差があり、「5年以上保育者」は「実習経験済学生」より重要視得点が低かった。よって、「5年以上保育者」は「実習経験済学生」よりも、自分自身の「言葉かけ」が乳幼児に対して「伝達（伝わる）」経験を積むことについて、新任保育者になってからの

乳幼児への「言葉かけ」の能力向上につながる重要性認識が弱いことが認められた。

第2に、表2に示した通り、「5年以上保育者」、「5年未満保育者」、「実習経験済学生」及び「実習未経験学生」の重要度得点の平均値が4以上であった。このことから、全対象が乳幼児に対する「言葉かけ」の「伝達（伝わる）」経験を重要視していることが認められた。

また、「言葉かけ」の「非伝達（伝わらない）」経験における保育経験年数の関係に有意差が認められた ( $F(3, 174) = 3.32, p < .05$ )。Tukey法を用いた多重比較の結果、「実習経験済学生」と「実習未経験学生」の組み合わせの間に有意差があり、「実習経験済学生」は「実習未経験学生」より重要視得点が高かった。よって、「実習経験済学生」は「実習未経験学生」よりも、自分自身の「言葉かけ」が乳幼児に対して「非伝達（伝わらない）」経験を積むことについて、新任保育者になってからの乳幼児への「言葉かけ」の能力向上につながる重要性認識が高いことが認められた。

第3に、表2に示した通り、「5年以上保育者」、「5年未満保育者」及び「実習経験済学生」の重要視得点の平均値が4以上であったが、「実習未経験学生」の平均値は3点台であった。このことから、「実習未経験学生」を除く3対象が乳幼児に対する「語彙選定」の「伝達（伝わる）」経験を重要視していることが認められた。

また、「語彙選定」の「伝達（伝わる）」経験における保育経験年数の関係に有意差が認められた ( $F(3, 170) = 6.02, p < .01$ )。Tukey法を用いた多重比較の結果、「5年以上保育者」と「実習経験済学生」の組み合わせ、「実習経験済学生」と「実習未経験学生」の組み合わせの間に有意差が認められた。

まず、「5年以上保育者」は「実習経験済学生」より重要視得点が低かった。よって、「5年以上保育者」は「実習経験済学生」よりも、自分自身の「語彙選定」が乳幼児に対して「伝達（伝わる）」経験を積むことについて、新任保育者になってからの乳幼児への「語彙選定」の能力向上につながる重要性認識が弱いことが認められた。

また、「実習経験済学生」は「実習未経験学生」より重要度得点が高かった。よって、「実習経験済学生」は「実習未経験学生」よりも、自分自身の「語彙選定」

が乳幼児に対して「伝達（伝わる）」経験を積むことについて、新任保育者になってからの乳幼児への「語彙選定」の能力向上につながる重要性認識が強いことが認められた。

このように、現職保育者と学生の乳幼児に対する「言葉かけ」「語彙選定」における「伝達（伝わる）」「非伝達（伝わらない）」経験の重要性が明らかになった（表3）

表3 現職保育者と学生の乳幼児に対する「言葉かけ」・「語彙選定」における「伝達（伝わる）」「非伝達（伝わらない）」経験の重要性の結果のまとめ

	伝達(伝わる) 経験の重要性	非伝達(伝わらない) 経験の重要性
言葉かけ	5年以上保育者<実習経験済学生	実習未経験学生<実習経験済学生
語彙選定	5年以上保育者<実習経験済学生 実習未経験学生<実習経験済学生	差なし

### 3.2 現職保育者と学生の乳幼児に対する「言葉かけ」「語彙選定」における「伝達（伝わる）」「非伝達（伝わらない）」経験の重要性の割合について

現職保育者と学生の乳幼児に対する「言葉かけ」における「伝達（伝わる）」「非伝達（伝わらない）」経験の重要性の割合は、表4と表5の通りである。この認識が、水準間でどのように異なるのかを明らかにするために、調査対象者から得られた回答に対して $\chi^2$ 検定を行った（表6と表7）。

ここでは、現職保育者と学生の乳幼児に対する「言葉かけ」「語彙選定」における「伝達（伝わる）」「非伝達（伝わらない）」経験の重要性の割合は、「伝達（伝わる）6割以上・非伝達（伝わらない）4割以下」、「伝達（伝わる）5割・非伝達（伝わらない）5割ずつ」、「伝達（伝わる）4割以上・非伝達（伝わらない）6割以下」を選定した。

その理由は、以下の2点である。

- ①「あなたは一斉保育の時のご自身の言葉かけが乳幼児に「伝わる経験」または「伝わらない経験」は、新任保育者になってからの乳幼児への『言葉かけ』と『語彙選定』の能力向上においてどのくらいの割合が重要だと思いますか」における回答の選択肢「伝わる10割：伝わらない0割」から「伝わる0割：伝わらない10割」の中に、回答者0名の箇所が見られた。

② 現職保育者の「実践知」の向上において、「言葉かけ」と「語彙選定」の「伝達（伝わる）」「非伝達（伝わらない）」の割合が、乳幼児への援助として「不安」や「困難」を抱えながらも、「自信」や「手応え」を得られる認識の割合は「伝達（伝わる）6割以上・非伝達（伝わらない）4割以下」、「伝達（伝わる）5割・非伝達（伝わらない）5割ずつ」及び「伝達（伝わる）4割以上・非伝達（伝わらない）6割以下」が妥当である。

表4 現職保育者と学生の乳幼児に対する「言葉かけ」における「伝達（伝わる）」「非伝達（伝わらない）」経験の重要性の割合（N=175）

対象	認識の割合（人数と割合（%））			合計
	伝達（伝わる）6割以上・非伝達（伝わらない）4割以下	伝達（伝わる）・非伝達（伝わらない）5割ずつ	伝達（伝わる）4割以下・非伝達（伝わらない）6割以上	
5年以上保育者	18(32.1)	20(35.7)	18(32.1)	56(100.0)
5年未満保育者	7(29.2)	13(54.2)	4(16.7)	24(100.0)
実習経験済学生	33(55.9)	17(28.8)	9(15.3)	59(100.0)
実習未経験学生	16(45.7)	10(28.6)	9(25.7)	35(100.0)
合計	74(42.5)	60(34.5)	40(22.0)	174(100.0)

表5 現職保育者と学生の乳幼児に対する「語彙選定」における「伝達（伝わる）」「非伝達（伝わらない）」経験の重要性の割合（N=168）

対象	認識の割合（人数と割合（%））			合計
	伝達（伝わる）6割以上・非伝達（伝わらない）4割以下	伝達（伝わる）・非伝達（伝わらない）5割ずつ	伝達（伝わる）4割以下・非伝達（伝わらない）6割以上	
5年以上保育者	15(28.3)	24(45.3)	14(26.4)	53(100.0)
5年未満保育者	7(29.2)	14(58.3)	3(12.5)	24(100.0)
実習経験済学生	30(52.6)	19(33.3)	8(14.0)	57(100.0)
実習未経験学生	12(36.4)	12(36.4)	9(27.3)	33(100.0)
合計	64(38.3)	69(41.3)	34(20.4)	167(100.0)

### 3. 2. 1 現職保育者と学生の乳幼児に対する「言葉かけ」における「伝達（伝わる）」「非伝達（伝わらない）」経験の重要性の割合

現職保育者と学生の乳幼児に対する「言葉かけ」における「伝達（伝わる）」「非伝達（伝わらない）」経験の重要性の割合が、水準間でどのように異なるのかを明らかにするために、調査対象者から得られた回答に対して $\chi^2$ 検定を行った。

分析の結果、有意な偏りが見られた（ $\chi^2(6) = 12.74, p < .05$ ）。残差分析の結果（表6）、「5年以上保育者」の「言葉かけ」において、「伝わる4割以下：伝わらない6割以上」の割合が有意に多く（ $p < .05$ ）、「5年未満保育者」の「伝達（伝わる）5割：非伝達（伝わらない）5割」の割合が有意に多い（ $p < .05$ ）こと

が認められた。また、「実習経験済学生」の「言葉かけ」において、「伝達（伝わる）6割以上：非伝達（伝わらない）4割以下」の割合が有意に多い（ $p<.05$ ）ことが認められた。「実習未経験学生」については、有意な偏りは見られなかった。

したがって、「5年以上保育者」と「5年未満保育者」は乳幼児に対する「言葉かけ」の能力向上において、「非伝達（伝わらない）」経験の割合を重要視する一方で、「実習経験済学生」は「伝達（伝わる）」経験の割合を重要視していると言える。

表6 現職保育者と学生の乳幼児に対する「言葉かけ」における「伝達（伝わる）」「非伝達（伝わらない）」経験の重要性の割合に関する残差分析の結果（ $N=174$ ）

対象	認識の割合（人数と割合（%））			合計
	伝達（伝わる）6割以上・非伝達（伝わらない）4割以下	伝達（伝わる）・非伝達（伝わらない）5割ずつ	伝達（伝わる）4割以下・非伝達（伝わらない）6割以上	
5年以上保育者	18(32.1) -1.9	20(35.7) 0.2	18(32.1) 2.0*	56(100.0)
5年未満保育者	7(29.2) -1.4	13(54.2) 2.2*	4(16.7) -0.8	24(100.0)
実習経験済学生	33(55.9) 2.6*	17(28.8) -1.1	9(15.3) -1.7	59(100.0)
実習未経験学生	16(45.7) 0.4	10(28.6) -0.8	9(25.7) 0.4	35(100.0)
合計	74(42.5)	60(34.5)	40(22.0)	174(100.0)

\* $p<.05$

### 3.2.2 現職保育者と学生の乳幼児に対する「語彙選定」における「伝達（伝わる）」「非伝達（伝わらない）」経験の重要性の割合

現職保育者と学生の乳幼児に対する「語彙選定」における「伝達（伝わる）」「非伝達（伝わらない）」経験の重要性の割合が、水準間でどのように異なるのかを明らかにするために、調査対象者から得られた回答に対して $\chi^2$ 検定を行った。

分析の結果、偏りは有意傾向であった（ $\chi^2(6)=11.53, p<.10$ ）。残差分析の結果（表7）、「実習経験済学生」の「語彙選定」において、「伝達（伝わる）6割以上：非伝達（伝わらない）4割以下」の割合が有意に多い傾向（ $p<.10$ ）が見られた。しかし、「5年以上保育者」、「5年未満保育者」及び「実習未経験学生」の3対象において、有意な偏りは見られなかった。

したがって、「実習経験済学生」は乳幼児に対する「語彙選定」の能力向上において、「伝達（伝わる）」経験の割合を重要視する傾向にあると言える。

表7 現職保育者と学生の乳幼児に対する「語彙選定」における「伝達（伝わる）」「非伝達（伝わらない）」経験の重要性の割合に関する残差分析の結果（ $N=167$ ）

対象	認識の割合（人数と割合（%））			合計
	伝達（伝わる）6割以上・非伝達（伝わらない）4割以下	伝達（伝わる）・非伝達（伝わらない）5割ずつ	伝達（伝わる）4割以下・非伝達（伝わらない）6割以上	
5年以上保育者	15(28.3) -1.8	24(45.3) 0.7	14(26.4) 1.3	53(100.0)
5年未満保育者	7(29.2) -1	14(58.3) 1.8	3(12.5) -1	24(100.0)
実習経験済学生	30(52.6) 2.7†	19(33.3) -1.5	8(14.0) -1.5	57(100.0)
実習未経験学生	12(36.4) -0.3	12(36.4) -0.6	9(27.3) 1.1	33(100.0)
合計	64(38.3)	69(41.3)	34(20.4)	167(100.0)

† $p<.001$

このように、現職保育者と学生の乳幼児に対する「言葉かけ」「語彙選定」における「伝達（伝わる）」「非伝達（伝わらない）」経験の重要性の割合が明らかになった（表8）

表8 現職保育者と学生の乳幼児に対する「言葉かけ」・「語彙選定」における「伝達（伝わる）」「非伝達（伝わらない）」経験の重要性の割合の結果のまとめ

	伝達(伝わる)・非伝達(伝わらない) 経験の重要性の割合		
言葉かけ	5年以上保育者	伝達(伝わる) 4割以下・非伝達(伝わらない) 6割以上	多い
	5年未満保育者	伝達(伝わる) 5割・非伝達(伝わらない) 5割ずつ	多い
	実習経験済学生	伝達(伝わる) 6割以上・非伝達(伝わらない) 4割以下	多い
語彙選定	実習経験済学生	伝達(伝わる)6割以上・非伝達(伝わらない)4割以下	多い傾向

#### 4. 考察

本研究は、現職保育者と学生の保育経験年数、乳幼児に対する「言葉かけ」「語彙選定」における「伝達（伝わる）」「非伝達（伝わらない）」経験の重要性と割合、この2つの関係を明らかにすることを目的とした。

##### 4.1 現職保育者と学生の乳幼児に対する「言葉かけ」「語彙選定」の「伝達（伝わる）」「非伝達」経験の重要性

第1に、表2に示した通り、「5年以上保育者」、「5年未満保育者」、「実習経験済学生」及び「実習未経験学生」の乳幼児に対する「言葉かけ」の「伝達（伝わ

る)」「非伝達(伝わらない)」経験の重要度得点の平均値が4以上であった。このことから、全対象が乳幼児に対する「言葉かけ」の「伝達(伝わる)」「非伝達(伝わらない)」経験を重要視していることが認められた。

第2に、表2に示した通り、「実習未経験学生」を除く「5年以上保育者」、「5年未満保育者」、「実習経験済学生」の乳幼児に対する「語彙選定」の「伝達(伝わる)」「非伝達(伝わらない)」経験の重要度得点の平均値が4以上であった。このことから、「5年以上保育者」、「5年未満保育者」及び「実習経験済学生」は、乳幼児に対する「語彙選定」の「伝達(伝わる)」経験「非伝達(伝わらない)」経験を重要視していることが認められた。

#### 4. 2 新任保育者になってからの乳幼児への「言葉かけ」の能力向上につながる重要性認識

##### 4. 2. 1 「5年以上保育者」と「実習経験済学生」の重要性認識について

「5年以上保育者」は「実習経験済学生」よりも、自分自身の「言葉かけ」が乳幼児に対して「伝達(伝わる)」経験を積むことについて、新任保育者になってからの乳幼児への「言葉かけ」の能力向上につながる重要性認識が弱いことが認められた。この「5年以上保育者」と「実習経験済学生」の認識のズレには、保育経験年数が関係していると考えられる。なぜなら、「5年以上保育者」は、乳幼児に対する「言葉かけ」において不安などの否定的な感情が伴う「非伝達(伝わらない)」経験を粘り強く積み重ね続けながら成長していると考えられるからである。

現職保育者の保育経験年数は、短期的または長期的に向上される専門性や現職保育者の成長を明らかにする最も重要な指標である(上山・杉村, 2015)。また、現職保育者や学生の保育経験年数に伴う認識のズレを検討する際、重要となる視点は省察であると考えられる。なぜなら、保育経験年数と省察には関係性があり、現職保育者の「実践知」の向上には、保育経験年数を重ねることも重要であるが、それとともに行う省察が不可欠だからである(上山・杉村, 2015)。

省察の特徴として、保育経験年数がある程度積み上げた現職保育者の場合、事例検討などによって自分の保育の曖昧な部分について再確認することの意味に気づいており、自分を振り返ることにより主体的な省察につながられる(平松, 2011)。ただし、保育経験年数が増えれば、自動的に知識や技能が獲得されるわけではな

く、省察においては乳幼児の状態に気づき、分析的に振り返ることが重要である（上山・杉村，2015）。

これらのことから、「5年以上保育者」は中堅保育者（5年～10年）に該当する（高濱，2001）ため、「5年以上保育者」の方が「実習経験済学生」よりも、主体的・分析的な省察が可能であると考えられる。すなわち、「5年以上保育者」の重要度得点は、自分自身の乳幼児に対する「言葉かけ」の「伝達（伝わる）」「非伝達（伝わらない）」経験を主体的・分析的な省察によって、高い基準で客観的に自己評価していることを反映していると考えられる。

他方、荒井（2016）は、学生が他者から収集した情報を自分自身や子どもに関する省察に利用していない可能性を指摘している。このことから、「実習経験済学生」が「5年以上保育者」よりも「伝達（伝わる）」経験を重要視している結果は、「実習経験済学生」の省察による主観的な自己評価の傾向性であることが示唆された。

「実習経験済学生」は「実習未経験学生」よりも、自分自身の「言葉かけ」が乳幼児に対して「非伝達（伝わらない）」経験を積むことについて、新任保育者になってからの乳幼児への「言葉かけ」の能力向上につながる重要性認識が強いことが認められた。保育経験が短い「実習経験済学生」の場合、実習の過程で自分自身の「言葉かけ」が乳幼児に伝わらない経験から不安や困難を抱くため、省察による自己評価からその重要性を「実習未経験学生」より高く認識すると推察される。よって、「実習未経験学生」は実習経験がないために、その重要性認識が「実習経験済学生」よりも弱くなったと考えられる。

#### 4. 2. 2 「5年以上保育者」と「実習経験済学生」の重要性認識について

「5年以上保育者」は「実習経験済学生」よりも、自分自身の「語彙選定」が乳幼児に対して「伝達（伝わる）」する経験を積むことについて、新任保育者になってからの乳幼児への「語彙選定」の能力向上につながる重要性認識が弱い傾向が認められた。「5年以上保育者」と「実習経験済学生」の認識のズレは、言葉かけの「伝達（伝わる）」経験の重要性における認識と同様に、保育経験年数が関係していると考えられる。なぜなら、「5年以上保育者」は保育経験年数を重ねる中で、乳幼児に対する「言葉かけ」の際に選択する語彙の成否に関し、成功と失敗の経験を繰り返しながら自らの援助を主体的・分析的に省察していると考えられるか

らである。

つまり、「5年以上保育者」の重要度得点は、自分自身の乳幼児に対する「語彙選定」の「伝達（伝わる）」経験における成否を、「言葉かけ」と同様に主体的・分析的な省察を通して、高い基準で客観的に自己評価していることを反映していると考えられる。また、「実習経験済学生」が「5年以上保育者」よりも「伝達（伝わる）」経験を重要視している結果は、まだ保育経験が短い「実習経験済学生」の省察による主観的な自己評価の傾向性である可能性を示唆している。

#### 4. 2. 3 「実習経験済学生」と「実習未経験学生」の重要性認識について

「実習経験済学生」は「実習未経験学生」よりも、自分自身の「語彙選定」が乳幼児に対して「伝達（伝わる）」経験を積むことについて、新任保育者になってからの乳幼児への「語彙選定」の能力向上につながる重要性認識が強いことが認められた。

この「実習経験済学生」と「実習未経験学生」の認識のズレには、乳幼児に対する「言葉かけ」における「非伝達（伝わらない）」経験の重要性の認識と同様に、保育経験年数が関係していると考えられる。なぜなら、「実習未経験学生」は実習経験がないため、乳幼児の発達段階に即した「語彙選定」における「伝達（伝わる）」経験の重要性に気づくことができていないと考えられる。また、「実習経験済学生」は実習経験があるため、省察による主観的な自己評価であっても、その重要性を「実習未経験学生」より強く認識していると推察される。

#### 4. 3 現職保育者と学生の乳幼児に対する「言葉かけ」「語彙選定」の「伝達（伝わる）」「非伝達（伝わらない）」経験の重要性の割合

##### 4. 3. 1 現職保育者と学生の乳幼児に対する「言葉かけ」の「伝達（伝わる）」「非伝達（伝わらない）」経験の重要性の割合

現職保育者と学生の乳幼児に対する「言葉かけ」における「伝達（伝わる）」「非伝達（伝わらない）」経験の重要性の割合について分析した。その結果、表6に示した通り、「5年以上保育者」と「5年未満保育者」は乳幼児に対する「言葉かけ」の能力向上において、「非伝達（伝わらない）」経験の割合を重要視する一方で、「実習経験済学生」は「伝達（伝わる）」経験の割合を重要視していると考えられる。

このことから、現職保育者は保育経験年数を積む中で、主体的・分析的な省察を通じた客観的な自己評価によって「伝達（伝わる）」経験に比べ「非伝達（伝わらない）」経験をより多く積むことが、自分自身の「実践知」の向上につながると認識しているのであろう。

しかし、「実習経験済学生」は「5年以上保育者」と「5年未満保育者」よりも、「非伝達（伝わらない）」経験の重要性の割合の認識が低い。このことから、まだ省察による自己評価が主観的であるため、「非伝達（伝わらない）」経験の重要性をそこまで強く認識していないと考えられる。

#### 4. 3. 2 現職保育者と学生の乳幼児に対する「語彙選定」の「伝達（伝わる）」 「非伝達（伝わらない）」経験の重要性の割合

現職保育者と学生の乳幼児に対する「語彙選定」における「伝達（伝わる）」「非伝達（伝わらない）」経験の重要性の割合について分析した。その結果、表7に示した通り、保育経験年数が短い「実習経験済学生」は乳幼児に対する「語彙選定」の能力向上において、「伝達（伝わる）」経験の割合を重要視する傾向にあると言える。このことから、「実習経験済学生」は実践後における省察による自己評価が不十分であり、「非伝達（伝わらない）」経験の重要性をそこまで強く認識していないと考えられる。

### 5. おわりに

本研究では、現職保育者と学生の保育経験年数、乳幼児に対する「言葉かけ」「語彙選定」の「伝達（伝わる）」「非伝達（伝わらない）」経験の重要性とその割合の認識、この2つには関係があることが明らかになった。ここで得られた知見を踏まえ、養成校は学生に「伝達（伝わる）」「非伝達（伝わらない）」経験の場を提供する上で、現職保育者と同様に主体的・分析的に省察し、自らの「言葉かけ」と「語彙選定」を客観的に自己評価できるように努めることが重要であると言える。

具体的には、学生に対して乳幼児への「言葉かけ」は「伝達（伝わる）4割以下：非伝達（伝わらない）6割以上」の割合で学習するよう、自己評価の観点を示すことが重要である。なぜなら、現職保育者の乳幼児に対する「言葉かけ」と「語彙選定」の「実践知」の向上において、乳幼児への援助として「不安」や「困難」

の感情を抱えながらも、「自信」や「手応え」の感情を得られる重要性の割合は「伝達（伝わる）6割以上・非伝達（伝わらない）4割以下」、「伝達（伝わる）5割・非伝達（伝わらない）5割ずつ」及び「伝達（伝わる）4割以上・非伝達（伝わらない）6割以下」が妥当であると考えられるからである。

したがって、養成校は、保育経験年数5年以上保育者の乳幼児に対する「言葉かけ」の「伝達（伝わる）」「非伝達（伝わらない）」経験の重要性の認識を踏まえた指導改善に努めることが重要である。これにより、学生が乳幼児に対する「言葉かけ」の適切さを省察する過程において、少なからず自己評価の客観性が増し、主観的な自己評価から、客観的で現実に即した自己評価につながるであろう。

### 【引用・参考文献】

荒井庸子、2016、“保育者を目指す学生における省察力：省察の特徴と省察力に関わる要因の検討”、浜松学院大学教職センター紀要、第5号、15-30頁。

福沢周亮・池田進一、2004、幼児のことばの指導、教育出版

後藤節美、2015、保育方法・形態、森上史郎・柏女霊峰（編）、保育用語辞典、ミネルヴァ書房

平松美由紀、2011、“幼児理解を深めるためのカンファレンスの検討－保育実践の一場面のカンファレンスの省察から－”、中国学園紀要、第10号、163-167頁。

保育教諭養成課程研究会、2016、幼稚園教諭・保育教諭のための研修ガイドⅡ－養成から現職への学びの連続性を踏まえた新規採用教員研修－平成27年度文部科学省委託「幼児教育の質向上に係る推進体制等の構築モデル事業

堀淳世、1997、“幼稚園教諭が語る指導方法－経験年数による違い－”、保育学研究、第35号（2巻）、280-287頁。

厚生労働省、2008、保育所における質の向上のためのアクションプログラム、厚生労働省

新藤慶、2008、“幼保総合施設の実態と課題－認定こども園を扱った諸研究の検討を中心として－”、新見公立短期大学紀要、第29号、181-188頁。

杉山成史・松尾剛・杉村智子、2016、“熟達保育者による「気になる子ども」の認識と支援プロセス”、福岡教育大学紀要、第65号、51-59頁。

- 諏訪きぬ、2000、保育選択の時代と「保育の質」金田利子・諏訪きぬ・土方弘子  
「保育の質の探求「保育者－子ども関係」を機軸として、ミネルヴァ書房
- 高濱裕子、2001、保育者としての成長プロセス、風間書房
- 高濱裕子、2013、保育者の熟達化プロセス、保育問題研究
- 戸田大樹、2015、“保育科学生の実習における課題に関する研究－言葉かけの問題を中心として－”、茶屋四郎次郎記念学会誌、第5号、125-134頁。
- 戸田大樹・荒木由紀子・岸正寿・舘秀典、2019、“保育者と学生が一斉保育で選択した主活動の際に見られた子どもの姿に関する実証的研究”、アジア教育文化ジャーナル、第1号、137-149頁。
- 戸田大樹、2020、“保育者の乳幼児に対する言葉かけ及び語彙選定に関する感情と保育経験との関係”、応用教育心理学研究、第37号(1巻)、3-13頁。
- 上山瑠津子・杉村伸一郎、2015、“保育者による実践力の認知と保育経験および省察との関連”、教育心理学研究、第63号(4巻)、401-411頁。
- 渡邊ユカリ、2002、“保育実習指導の課題について－保育所の実習指導担当者への調査からの考察－”、秋草学園短期大学紀要、第19号、107-113頁。

#### 謝辞

本研究は、「戸田大樹・濱川喜亘・岸正寿・榊原久子・舘秀典・高橋健司・飯塚汐里(2019)保育経験年数が乳幼児への言葉かけと語彙選定に関する伝達・非伝達経験の重要性と割合についての認識に与える影響－現職保育者と保育者志望学生の比較を通して－」教育学論集、(71)、171-182」の論文に統計処理を加え、加筆修正したものです。

調査に協力して下さった保育者と学生の方々に御礼申し上げます。また、本論文の執筆に際して、ご指導いただきました査読の先生に深く御礼申し上げます。

(受付日：2020年10月4日、  
受理日：2021年1月10日)